

NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

季刊

vol.

220

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成29(2017)年1月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙パルプ配合再生紙使用

天理大学
創立90周年
記念特別展

特別展 ギリシア考古学の父

シュリーマン

初公開！ティリス遺跡原画の全貌

ハインリヒ・シュリーマン（1822-90）は、ドイツ人の考古学者で、「トロイの木馬」伝説で有名なトロイ遺跡を発掘したことで知られます。

本展では、シュリーマン最後の発掘報告書『ティリス』の貴重な図版原画を紹介します。ティリス遺跡はトロイと争ったミケーネ文明の重要な宮殿で、巨人が築いたとされる重厚な城壁が特徴です。

さらに、シュリーマンを魅了したギリシアやエジプトの古代文明、そして彼を輩出した19世紀の学問について、天理大学所蔵の優品から紹介します。

ティリス遺跡原画は、長らく天理大学附属天理参考館に所蔵されていましたが、同館の学芸員でさえ「世界的に有名なシュリーマンの原画が、本当に手元にあるものだろうか」と、確信を持てずにいたそうです。

しかし、近年の調査によって原画にある書き込みがシュリーマン直筆であることが判明し、正真正銘本物の原画であることがわかりました。

本展ではこの貴重な原画を中心に取り上げ、偉大な考古学者シュリーマンの知られざる実像に迫ります。

（鈴木 雅）



ティリス遺跡（興善信氏撮影）

2016年 12月17日|土| → 2017年 1月29日|日|

天理大学
創立90周年
記念特別展

特別展 ギリシア考古学の父

シュリーマン

初公開！ティリンス遺跡原画の全貌

偉人シュリーマン
その虚像と実像

自伝『古代への情熱』

シュリーマンの人生は、一般的にベストセラー『古代への情熱』によって知られています。この自伝の中でシュリーマンは、幼い頃からギリシア神話の世界に憧れており、幼なじみの少女ミナと将来結婚して共にトロイの遺跡を発掘しようと約束を交わします。

シュリーマンは奉公に出て努力を重ね、ロシアで商売を成功させるとミナに結婚を申し込みます。しかし不運にもすでにミナは別の男性と結婚していました。彼は深く落胆しますが、発掘への情熱は止みがたく、事業を清算したのち彼は満を持して考古学に身を投じるのでした。時に1868年、シュリーマン46歳のことです。

夢とロマンとほろ苦い挫折に彩られた彼の人生は、世界中の人々を魅了してきました。しかし、1980年代から書簡や日記を注意深く読み込んだ研究が進み（デイヴィッド・トレイル著・周藤芳幸ほか訳『シュリーマン—黄金と偽りのトロイ』など）、これまで知られていた彼の人物像は、その多くが脚色に基づくものであることがわかってきました。

シュリーマンの実像

実は、彼が考古学を志したのは中年になってからでした。大富豪になっても家族の愛は得られず、学問や教養に新しい人生を見出そうと模索する中で考古学の道を選んだと考えられています。

ミナと交わした結婚の約束も、数多い脚色のうちの一つでした。シュリーマンは著書『イリオス』

の序文で自分の半生を振り返る際に、幼い頃の片思いを結婚の約束に書き替え、しかも、ミナ本人にこの本を送りつけたのです（！）。とはいえ、後にシュリーマンが帰郷した際にはミナも会いに来てくれているので、彼にはどこか憎めない不思議な魅力があったのかもかもしれません。

シュリーマンの発掘は、「トロイ王プリアモスの財宝」を発掘するなど、あまりにも劇的な発見をもたらしたので、悪い意味で商売上の才覚が発揮されたのではないかと疑惑を生んでいます。コスト意識からか拙速な発掘作業を行い、記録が不十分なまま遺跡を破壊してしまうこともありました。

しかし彼は、経験を積み、熟練した研究者たちと議論を交わし助言を受ける中で、多くのことを謙虚かつ貪欲に学び取っていきます。最後の著書となった『ティリンス』の発掘現場でも、若き考古学者デルプフェルトを招き、彼の指導の下で層位ごとに発掘を進める当時最新の方法を導入しています。今回紹介する原画はこの時のものですから、彼の考古学人生の到達点と言っても過言ではないでしょう。

展覧会情報

会 期■平成28年12月17日(土)～平成29年1月29日(日)

休館日■毎週月曜日(祝日の場合は開館、翌日休館)、

第4火曜日、年末年始。12月27日(第4火曜日)は特別開館！

(会期中の休館日 12/19・26・29～31、1/1～3・10・16・23・24)

主 催■名古屋市博物館、天理大学、天理大学附属天理参考館、

毎日新聞社、日本経済新聞社、テレビ愛知

観覧料■一般800(600)円、高大生600(400)円、中学生以下無料

()内は20名以上の団体料金

※名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用してご来館の方は100円引き。

※身体等に障害のある方または難病患者の方は、手帳または受給者証のご提示により本人と介護者2名まで当日料金の半額。

※各種割引は重複してご利用いただくことはできません。ご了承ください。

驚異の図面、伝説の遺跡を世に伝える。



『ティリンス』図版 I 「要塞ティリンスの平面図」原画（天理参考館蔵）

古代文明のロマン

シュリーマンの功績は単に伝説の舞台を発掘しただけではありません。ギリシア文明の始まりを当時考えられていたよりも 1000年遡らせ、歴史を大きく書き替えたのです。

また、彼はギリシアの発掘で成功を取めただけでは飽き足らず、ティリンスの発掘を終えた後にはエジプトでも発掘を試みています。

エジプト旅行の際には、見学した壁画にミケーネ文明の土器が描かれているのを見つけ、トロイ遺跡の年代を解明する重要なカギとなりました。



把手付杯 ギリシア LH I 期
(前1680-1600頃)
(天理参考館蔵)



ヌン碗 エジプト 新王国時代
(天理参考館蔵)



『ティリンス』図版XXIII&XXIV原画
(天理参考館蔵)

ティリンス遺跡の発掘には、有能な技師や画家が招かれて、遺構や出土品の正確な図面を作成しました。これらの図面は報告書に掲載され、その精巧さは高い評価を得ました。図面を通して多くの人が、明らかにした遺跡の姿を目の当たりにすることができたのです。

その時、世界は...

シュリーマンの生きた19世紀は、西欧列強が世界中に進出した時代。印刷技術の進歩もあいまって、各地の地誌や調査報告書が盛んに刊行されました。シュリーマンの先進的な発掘報告書も、こうした時代の流れから生まれたのです。



ティリンス遺跡城壁（巽善信氏撮影）



ナポレオン皇帝版『エジプト誌』
(天理図書館蔵)

九州遠征 ～MARO 初の館外視察～

昨年(2019)の8月、名古屋市博物館サポーター MARO の精鋭9名は、顧問と博物館の学芸員とともに九州国立博物館(以下九博)の視察を行いました。その目的は、「大学との連携による名古屋市博物館の魅力向上事業」として、来る2/11・12(土・日)に開催されるイベントに向けて、九博ボランティアのノウハウを学ぶことです。今回は、視察の報告と2月のイベント情報についてお伝えしようと思います。

そもそもMAROって？

名古屋市博物館サポーター MAROは名古屋市博物館(以下名市博)に若者を呼びこむことを目的に、名古屋市立大学の学生を中心として結成されたボランティア団体です。設立から数年で歴史は浅いですが、今年度は部員数が50人を超え、より楽しい名市博を目指しイベントを行っています。昨年(2019)の8/6・7(土・日)に行われたナイトミュージアムでは、屋外で特大ピンボールと七夕飾りを開催。さらに館内の常設展では、縄文・戦国・明治時代をモチーフにしたアイドルが歌って踊る「超時空アイドル総選挙」を行いました。500人以上の参加者に投票いただきNO.1のアイドルを決定しました。その他、MAROについてもっと知りたいという方は公式HPまでお願いします！

<http://museumsupporter-marowixsite.com/maro>



MAROの公式キャラクター まるいぬ

学びにあふれた九博初体験

名古屋を出発して新幹線で移動すること三時間半、福岡県に到着したMARO一行は福岡市博物館と福岡アジア美術館へ向かいます。夜には九博の学生ボランティアOBや香蘭女子短期大学の教授と懇親会を行い、交流を深めました。

二日目は待ちに待った九博です。九博を訪れるのは初めてだったのですが、建物の大きさと最新設備、そして特別展の人だかりに腰を抜かしそう

になりました。まず九博の職員の方に館内を案内していただき、九博の学生ボランティアやイベントについてお話を聞きました。午後からは自由行動で九博を存分に楽しみました。“アジアの原っぱ”としてアジアの文化を五感で体験できる「あじっぱ」と特別展を鑑賞したところで閉館時間に。常設展の見学を明日に回して夜は九博の方々と懇親会へと出発。お話は多岐にわたり、話題が尽きることはありませんでした。

三日目には年に300回も展示内容が変わるという九博自慢の常設展を、ガイドボランティアの説明付きで観覧しました。さらに、8/20・21(土・日)に九博で開催されていた吉野ヶ里Daysワークショップに参加しました。勾玉づくりや組紐、青銅器鑄造の体験を楽しみながら、ワークショップを運営するためのノウハウも同時に学ぶことができました。長いようで短い二泊三日の視察旅行は終了です。博物館は決して見るだけの一方的な場所ではないという今回の学びを次のイベントを通して皆様にお伝えいたします！



吉野ヶ里Days in九博にて作ったもの

博物館で作るモノ語り～イベントのお知らせ

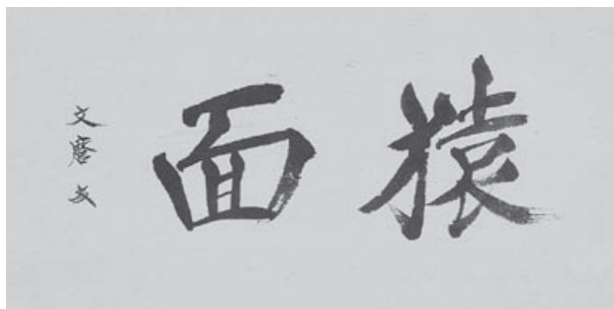
2/11・12(土・日)に、九博さまの力を借りて、MAROによるワークショップを博物館にて行います。2/11(土)から開催される「企画展 名古屋の衣生活」に関連した内容となる予定です。組紐やつづれ織り、端切れで作るお守りやストラップ、型染めメッセージカード、さらには衣装体験やビンゴゲームまで、どんな方でも楽しめるイベントを企画しています。さらに、それぞれの企画をオリジナルストーリーでつなぎ合わせる新感覚のワークショップになる予定です。参加費は無料(別途、常設展入場料が必要になります)。詳細は、今後博物館のホームページにてお知らせしていく予定です。お楽しみに！

(名古屋市博物館サポーターMARO 加古浩之)

もりかわによしゆんあん さるめんちゃせき 森川如春庵と国宝「猿面茶席」 —二つの「猿面」を通して—

書「猿面」

森川如春庵（1906～1980）は近代尾張を代表する茶人である。その茶道具を主とするコレクションは平成18年（2006）に当館所蔵となったが、この中に「猿面」の二文字をしたためた書の掛幅がある。本紙は縦38.5cm、横61.0cm。筆者は、左端の落款「文麿」から近衛文麿（1891～1945）とわかる。これを収めた箱の蓋裏には森川の直筆で「徳川園に寄付せし猿面席に掲げる為め公に直に御願申たるものなり也」と記されている。森川からの聞き書き（昭和55年刊『森川コレクション』）によれば、京都の大徳寺孤蓬庵で近衛文麿に直接揮毫を依頼し、その場で書き上げてもらったという。



書「猿面」（森川コレクション）名古屋市博物館蔵

二つめの「猿面」

ここで、この書に関わるもう一つの資料を紹介したい。名古屋城が所蔵する木製の扁額「猿面」である。額裏に「昭和十五年四月吉日 中島郡大和村刈安賀 森川勘一郎」と墨書されており、「猿面」の文字の姿形も、左端の「文麿」の落款も、森川コレクションの書「猿面」とまったく同じ。しかも、大きさは縦38.5cm、横68cm。書「猿面」をもとにして仕立てた額だろう。

徳川園に寄付せし「猿面席」とは

さて、この名古屋城の額「猿面」について考える前に、博物館の書「猿面」の箱書にある「猿面席」について、見ていこう。

「猿面席」と言えば、もとは名古屋城二の丸にあり、昭和12年（1937）7月29日に国宝の指定を受けた猿面茶席のことが、まず思い浮かぶ。しかし、国宝「猿面茶席」は明治初期に名古屋城を出て転々としているものの、徳川園に移築されたことはない。

徳川園は、昭和6年（1931）に尾張徳川家から名古屋市に寄贈された庭園である。そこで、市政資料

館で戦前の公文書を調べると、昭和12年（1937）2月25日付で森川が徳川園へ「猿面茶席写一棟」を建設した上で寄贈する旨を申し込み、同月27日に名古屋市は受納を決定していた（「昭和12年度寄附金品収受二関スル綴（2分冊の2）」、索引番号218）。つまり、「猿面席」とは森川自身が国宝を写して徳川園へ新築した茶席とわかる。

なお、昭和14年（1939）4月に徳川園で行われた三傑会主催の茶会記によれば、森川は茶席「豊庵」の席主をつとめており、この「豊庵」こそが国宝「猿面茶席」の写しであったと、大野一英編著『茶どころ名古屋』（昭和61年刊）において岡本健治氏は回想している。

二つの「猿面」の来歴について

さらに公文書を調べていくと、昭和17年（1942）8月25日付で、徳川園に寄付した茶席の備品として、森川は「近衛公書額壹面」の寄贈を申し込み、9月10日に受納が決定されていた（「昭和17年寄附金品台帳」、索引番号51）。筆者が近衛文麿、しかも国宝「猿面茶席」の写し「猿面席（豊庵）」の備品と指定されている書額なので、名古屋城に現在残されている額「猿面」とみて間違いないだろう。

書と額、二つの「猿面」について一連の経緯をまとめると、まず、森川は昭和12年2月末に徳川園への茶席の寄贈を申し込み、遅くとも昭和14年4月までに茶席は完成している。次に、その茶席に掲げる額を制作する為、昭和12年から政界のトップであった近衛文麿に書の揮毫を依頼、それをもとに昭和15年4月までに書額を完成させ、昭和17年7月にその額の寄贈を申し込んでいる。徳川園へ書額「猿面」を寄贈した後、森川の手元に書「猿面」は残され、後日掛幅に仕立てられ、名古屋市へ寄贈された。

国宝「猿面茶席」の再建へ

書「猿面」の箱書をたどって調査をした所、写しの茶席や書額「猿面」の制作・寄贈など昭和12年から顕著になった森川の国宝「猿面茶席」に関わる動きが見えて来た。そして、この流れは、戦後も尽きない。

昭和20年（1945）、国宝「猿面茶席」とその写し「猿面席（豊庵）」、二つの猿面茶席は戦火に消えた。しかし、森川は名古屋城再建後援会役員の1人として、名古屋城内に国宝「猿面茶席」を再建すべく尽力した。昭和24年（1949）11月、猿面茶席はついに名古屋城御深井丸に再建され、現在に至っている。

（塚原明子）

採録

名古屋の 衣生活

伝えたい記憶 残したい心

2017年2月11日(土) 3月26日(日)

休館日 ■毎週月曜日(祝日の場合開館、その直後の平日休館)と第4火曜日
会期中の休館日; 2/13、20、27、28、3/6、13、21

開館時間 ■9時30分～17時(入場は16時30分まで)

観覧料 ■一般300(400)円/高大生200(300)円/中学生以下無料

市内在住の65歳以上100(200)円

※敬老手帳等の掲示が必要。他の割引との併用はできません。

※()内は常設展との共通料金。※名古屋市交通局の一日乗車券・ドニエコきっぷを利用し
て来館された方は50円割引。※身体等に障害のある方または難病患者の方は、手帳または受
給者証のご提示により本人と介護者2名まで無料。※各種割引は重複してご利用いただくこ
とはできません。※30名以上の団体は割引があります。お問い合わせください。

衣生活を
いろんな
テーマから
紹介

人はどうして衣服を着始めたか—衣服の起源には諸説あります。身体保護説、呪術説、羞恥説、装飾説、標識説…。いったい最初に衣服を着た人はどう思っていたのでしょうか。それはわかりませんが、それから何千年とたった今、衣服を着る意味はいくつもあるということははっきりしています。衣服は身体を包み守るだけではなく、人生儀礼や身分を表す社会的な意味や、おしゃれや流行を表す文化的な意味も持っています。また、衣服は身に付けるだけでなく、その素材を生産し製作すること、それを生業とすることもあり、暮らしを立てる手段にもなっています。「衣服」というのは私たちの生活に深く関わってきました。そしてそれは、地域で長い間培ってきたものともいえ、その地域の歴史や暮らしが表されます。また、そこには先人たちの知恵や工夫を見ることが出来ます。

私たちの住む名古屋ではどうでしょうか? 展覧会では4つの章に分けて、主に明治・大正・昭和にかけての“衣”を見ていきます。

第1章「身にまとう①—晴れ着と普段着」では、昔の人はどのようなものを着ていたか? その時と場合に注目し、ハレの日と普段の生活での装いを紹介します。

第2章「身にまとう②—町と村の衣服」では、地域に注目して紹介します。名古屋を都市部と農業・漁業を生業とする農村部・漁村部に分けて、それぞれの装いを見ていきます。

第3章「着物をつくる—機織りと裁縫」では着物の作り方に注目しました。着物はそもそも自分たちで織って仕立てることが古くは行なわれていました。手間ひまはかかりましたが、そこには工夫や知恵が盛り込まれています。

第4章「暮らしを立てる—養蚕と絞り」では衣に関する仕事のうち、現金収入のために行っていた養蚕や絞りのくくり作業を取り上げて紹介します。

<展示構成>

第1章 身にまとう①—晴れ着と普段着

第1節 人生の節目と衣服

第2節 普段着の着こなし

第3章 着物をつくる—機織りと裁縫

第1節 消えゆく手織りの記憶

第2節 仕立てから繕いまで

第2章 身にまとう②—町と村の衣服

第1節 町の暮らしと衣服

第2節 工夫をこらした仕事着

第4章 暮らしを立てる—養蚕と絞り

第1節 暮らしの中心はおかいこさん

第2節 有松・鳴海絞り くくり手の女性たち

振袖

収集：南区赤坪町
明治 34～35 年にこしらえた花嫁衣裳。自家製の繭からつむいだ糸で織ったものだという。戦後になると貸衣装が増え、このような自分で作る衣装は少なくなっていく。

蚕籠 (地方名: エンザ)

収集地: 守山区
蚕を飼う籠。名古屋市では養蚕は明治に入って盛んになった。この籠いっぱい蚕とえさとなるクワの葉が敷き詰められていた。

地域の人に
昔のくらしを
インタビュー

今回の展覧会に合わせて、各テーマに1名から数名の方に話を伺いました。昔はどのようなくらしをしていたか？それは本などで調べれば知ることできますが、実際に経験した人に改めて話を聞いて事例を確認するとともに、その心情をも感じることができます。例えば、嫁入り道具を嫁ぎ先の家で近所に披露することがありますが、これを用意するのは花嫁の親でした。ある女性の話では、嫁ぎ先のおばあさんが和裁の先生をしていたため、親が一生懸命着物を何十着も用意してくれたそうです。「私の親は大変だったと思うよ」。昭和38年ごろ、同級生はこのような披露をしなくなっていたところで、このエピソードから当時の様子やそのときの心情がうかがえます。

なくなっていく
「手作りの技」
にも注目

「どうやってモノをつくるか？」詳しく見ていくと、合理的で無駄のない手順に思わずうなずいてしまいます。例えば機織りの場合、余った短い糸はよこ糸に入れたり、束にして縋^なって紐にしたり（これをまた機織りの部品を縛るのに使う）、糸を無駄なく使う工夫が見られました。今では日常に必要なものとなっても、そこに残された知恵や工夫は長年の蓄積を経てきたものであり、人々がどうくらしてきたかを教えてください。



機織り機
収集：緑区大高町
今ではすることのなくなった機織り。糸から準備して機を織るには、いくつもの手順がある。現在手織りの技を伝えている団体に協力いただき、動画で記録した。

長年博物館で
収集してきた
着物や道具を
展示

今回の展示は、博物館で収集したさまざまな着物や道具、そして地域の人に何った昔のくらしの様子などを交えて紹介しています。展示資料のほとんどは博物館の開館当初から、市民のみなさんが寄贈してくださったものです。この博物館だよりや展示を見て「こういうの、うちにもあるよ」、「おばあさんが使っていたの、見てたわ」という方も中にはいると思います。

これらの着物や道具は、身近なものだったので珍しくはないかもしれませんが、私たちの住む名古屋という地域の歴史やくらしを知るための大切な資料です。それゆえに道具は、たとえ同じものが骨董市で売っていたとしても、ほかの町の博物館で保存していたとしても、それらとは決して替えることができない、貴重な資料となるのです。加えて、使っていた人たちの話を記録し、いっしょに残すことができれば、より充実した資料となります。

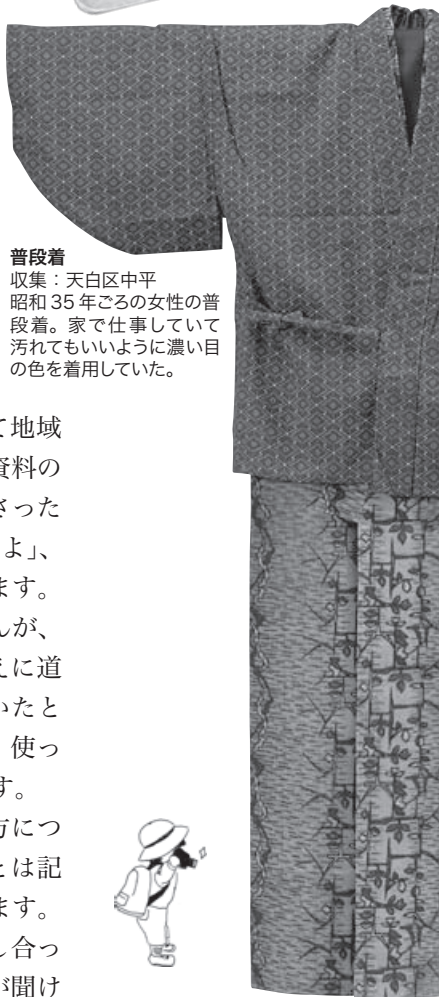
しかし、こうした着物や道具は使われなくなり廃棄され、そのくらしや道具の使い方について記憶を持っている方も少なくなってきました。だからこそ、今残しておけることは記録しておく、これも博物館の重要な仕事であり、今回の企画展で目指すところでもあります。あなたはどんな衣服を着てきましたか？ぜひご家族やお友達で展覧会を見に来て、話し合ってみてください。きっといろいろな話が出てくるはずです。あわよくば、私もその話が聞ければ…。みなさんのご来館をお待ちしております。

(佐野尚子)

聞き取りメモ
8/3 天白区
ここへね、来たはなにね、わしたちもタンスの前へずー
とこう並べて、見にみえた人がこうやってね、中どんな
着物持って来おったかね、みんな見よったよ。
一タンスの中に着物が入っているんですね？
入ってる。入ってる。
一タンスの前にも広げるんですか？
前に出すの。前にみんなこう・・・。裁ち台が、和裁の
裁ち台って。木の。その上にずーと並べたりね、裁ち台
の上に並べたり、たたみの上について置いてたりして。
わたしたちはやったよ。おばあちゃんが「見せないか
ん」って言うって。ほで、わたしが鏡かつたら、おばあちゃん
そしたら怒られちゃったの。鏡かけたら、おばあちゃん
に怒られちゃったの。「みんなに見せないかんのに、
ほんなあんた鏡かけて」って言うってね。
一こういう着物を置いたんですか？
持ってきた。いい着物が多い。タレモノが多いね。
なんかのタレモノが多いね。あれに入ったまま、包んどく
文庫に入ったままね。
んなが開いて見たんですか？
一裁ち台の上も文庫を置いたんですか？
文庫の上に。その自分たちで見た。文庫を横へや

普段着

収集：天白区中平
昭和35年ごろの女性の普段着。家で仕事して汚れてもいいように濃い目の色を着用していた。



イベントのご案内

※イベントはすべて展示会場内でおこないます(要観覧券)。参加希望の方は当日の開始時間までに会場入口にお集まりください。
※ギャラリートークなどで手話通訳・要約筆記などによるサポートをご希望の方は、当日の2週間前までに名古屋市博物館までご相談ください。

ギャラリートーク

3月18日(土)14時～14時45分 定員30名

講師 当館学芸員

実演：機織り一布を織るってどうやるの？

2月26日(日)、3月15日(水)、3月26日(日)

いずれも14時～14時30分

講師 当館学芸員

◇糸がどうやって布になるか、順番に見ていきましょう。

クイズラリーに挑戦！

①採録コース 3月5日(日)10時～12時

②昔の知恵コース 3月11日(土)10時～12時

どちらのコースも定員20名

◇展覧会を見ながらクイズに挑戦しましょう。クイズのあとは答え合わせ。学芸員と一緒に回って解説します。最後に「衣生活伝承者」認定証とステキな缶バッジをプレゼント。

新収資料紹介 三十六歌仙書画色紙帖 —小松屋酒井家本帖より—

この度、名古屋玉屋町（現中区錦）にあった商家小松屋酒井家より、四代目酒井平兵衛以降、随時収集した書画類・茶器類を受贈した。その中から、江戸時代に婚礼などの折に誂えられた調度品と思われる「三十六歌仙書画色紙帖」を紹介する。

この資料は、平安中期の歌人藤原公任が撰んだ『三十六人撰』に基づき、三十六歌仙の和歌と絵姿を交互に配したものである。見開きを一組とし、歌仙の姿絵と和歌色紙を左右に貼り込んでいる。左右の位置は一定していない。

本帖は、折帖と呼ばれる製本形式で仕立てられており、表紙には牡丹唐草模様の金欄を使用。台紙は金銀箔で装飾された厚紙を用いている。

絵は絹本に描かれている。人物の表情や着物の描き方からみて、土佐派の絵師によるものであろう。なお、本帖には昭和5年（1930）に鑑定家古筆了任（1875～1933）が極めた折紙（鑑定書）が付されており、これによると、土佐光祐（1675～1710）の手と伝わっている。

和歌は、金泥による霞引きや金箔の雲形の装飾が施された料紙に書かれている。筆跡をみると、線の肥瘦や文字の大小の変化の様子から、およそ江戸中



三十六歌仙書画色紙帖より紀貫之 鷹司兼熙筆

期ごろの書風と見受けられる。さらには、それぞれ異なる筆跡であることから、一人一首ずつ担当して書いた寄り合い書きであると思われる。

和歌の右上には、鑑定家古筆家第五代了珉（1645～1701）の極札（鑑定書）が付されており、筆を執ったとみられる36名の公卿・親王の名が書かれている。

歌仙の筆頭、柿本人麻呂は、江戸中期宮廷内で権勢をふるっていた近衛基熙（1648～1722）。紀貫之には、霊元天皇と東山天皇に仕え、関白にまで昇り詰めた鷹司兼熙（1660～1725）の名が見える。その他、霊元天皇と親交が深く歌道に通じていた中院通躬、書流の一派持明院流の流れを組む名家出身の持明院基時の名もある。

鷹司兼熙は、本帖のみならず、江戸時代を代表する絵師が描いた絵画に付されている和歌賛を数多く書いている。今回は、山本素軒筆「十二ヵ月花鳥図屏風」（サンフランシスコ・アジア美術館蔵）の和歌賛など、兼熙の筆跡と断定できる資料と本帖を比較した。文字の造形的な特徴などを見て検討したところ、概ね兼熙の筆跡と思われた。

他の公卿・親王の筆跡も兼熙同様、可能な限り本人と認められている筆跡との比較を試みた。その結果、極札に書かれた人物名と和歌色紙の筆跡は概ね合致していると見てよいだろう。よって、この極札の信ぴょう性をそれほど疑う必要はないと思われる。

次に極札に書かれている人物の生没年から制作年代を考える。最も遅く誕生したであろう二条綱平の生年寛文12年（1672）から、最も早く逝去した梅園季保の没年元禄4年（1691）の間に制作されたことがわかる。加えて、極札裏面に記載された了珉の鑑定年が元禄4年（1691）であることからみても、推定年代に問題はないとみなせる。

制作当時の宮廷や文化の最先端を担う人物が携わっていることが、上記の事象により認められる本帖は、今後、他の同時期の作例の筆跡を考究していく上で活用が期待できる。

（星子桃子）

昭和52年（1977）に開館した名古屋市博物館は…

今年、平成29年（2017）に40周年を迎えます。

次号からは、40周年を記念したスペシャルな取り組みを発信していきます。乞うご期待！